

心靈の獨立

(五) 従つて各人は彼れ自身の獨立せる道德的並びに心靈的生活を有さねばならぬ事と、

倫理生活の自由

(六) 而して又義務の命令は即ち愛の命令であるが故に倫理的生活は極めて自由なるものである事の思想である。

イエスの天父観は感情的な

(七) 吾人が茲に特に注意すべき事は、イエスが神を父とする此の思想の論理的結果を感情的の方法に於て云ひ表はして居らぬ一事である。彼は唯だ神の愛の一面をのみ高調して人の感情を刺戟する如き事はせられなんだ。彼は凡ての深き真理は其の中に根本的に有難く辱けなき方面を有すると同時に、又其の中に嚴そかなる慎しむべき方面を有する事を忘れ給はなんだ。イエスは神が父であればこそ、人々は或は之に對して従順な子供ともなり、又は不従順な子供ともなり得る事を忘れ給はない。而して生命の眞髓が愛であればこそ、利己的にして人を憎む所の生活は常に自らと争闘しつゝあり、又神の全宇宙と衝突しつゝあると云ふ真理を忘れ給はない。イエスは神を眞の父であると認むるが故に、罪は裁判官や立法官の眼に映するより

嬰兒の如き性質

も一層恐ろしきものとして、其の天父の眼に映せねばならぬ事を知り給ふた。又イエスは人に無限なる進達と幸福の機會が開かれてある事を知るが故に、斯かる貴き機會を逸して神に對する孝道を誤まる者の損害の如何に怖ろしきものなるかを感じ給ふたのである。而してイエスが最も深く人生の嚴肅なる事を感じせられたが故に、彼れの教訓の一特徴として吾人の屢々論じた所の彼の驚くべき眞摯の態度が生じて來たのである。此の眞摯の態度は山上の説教の結尾に於て最も明かに表はされて居る(七の一三—二七)。(八) イエスが天國に入るべき唯一の門戸として嬰兒の如き謙虛信賴の性質を高調し、且悔改と信仰の必要を反覆高調せられたのは、同じく神を天父とするの確信から來たものである。何となれば人が或る偉大なる人格に接近し來るの自覺を有すれば有する程、信賴の情が非常に必要である事を見るが故である。神人兩つながらの個人的關係の如何なるものも、相互の自現並びに之に感應する信任の情に基かないならば決して進歩するものではない。而して若し人神の生命の分與に與からんと欲するならば、彼は疑

イエスの
教訓の統
一の見方

ひもなく神の如き生命即ちイエスの悔改の概念に存する所謂新らしき精神を抱かねばならぬ。即ち生れ更はりて嬰兒の如くなる必要があるのである。イエスの教訓の統一に就て今一つの見方は以下の如く云ひ表はされ得るであらう。

- (一) イエスの思想に於て根本的の確信は世界の中心に愛が存すると云ふ事である。
- (二) 故に凡ての生活の目的は凡ての人格の間に愛の關係を建設する事に存する。
- (三) 従つて品性感化並びに幸福に對する人生の根本性質は、全然愛の根本的要素である所の品性の資格であらねばならぬ。
- (四) 而して若しも世界の中心に愛が存するならば、吾人は先づ吾人自身の天性を信せねばならぬ、即ち吾人の最後の道德的證明は吾人自身の理性並びに良心にまで訴へる所の證明、云ひ換へれば吾人の靈眼の光に映するものであらねばならぬ。

最後の問
題は倫
理的に
解決す
る乎

イエスの
最高善
の觀念

- (五) 正義の生活に到る最大の動機は、世界の中心の愛に對する根本的確信から直接に流れ来る所の動機であらねばならぬ。
 - (六) 而して個人的並びに社會的兩つながらの向上進歩に於ける第一の手段は、人生の種々なる境遇に於て愛が要求し且つ人類の經驗が確かむる所の、是等の人生の根本的法則に服従するに存するのである。
- 最後に若しもイエスが一個の倫理的系統を有するや否やと云ふ問題が提出されるならば、其問題は結局以下の間を意味するのである。(一) イエスは明かに人の最高善若しくは幸福の問題を解決せられたか。(二) 義務若しくは正しき行爲の問題即ち道德律の何物たるかを解決せられたか。(三) 道德的生活の能力即ち良心の問題を解決せられたか。(四) 道德的生活の必然的前提たる自由意志の問題を解決せられたか。イエスは如何に是等の問題を取扱はれたかと云ふ質問に外ならぬのである。
- 是等の間に答へて吾人は云はんことを欲する。イエスは前に列べた如き形式に於ては是等の問題を自己に提出せられなかつたけれども、彼は明かに人

の最高善は神の國の實現にまで全人の活動を向けるにある事を信じ給ふた。即ち神の國の實現とは個人又は社會の生活に於ける愛の支配を意味し、神の永遠無窮なる目的に参加する人の可能性を意味するものである。故にイエスの弟子の祈るべき祈りの中心思想は、かの『聖旨の天に成る如く地にも成らせ給へ』と云ふ一言に歸着するは當然の事である。

イエスの義務觀

第二に義務の問題に就ては、イエスに取つて正しき行爲即ち道德律に對する服従は、吾人が天父の中に認むるが如き彼の偉大なる愛の抱擁的美徳中に總括さるべきものである。此の愛はイエスが彼自らの生活に於て實現し給ふた所であつて、人の罪を赦し進んで人に仕へ全く自己を犠牲にする所の愛である。一切の義務は愛に於て全うせられる。

イエスの良心觀

次に道德的能力即ち良心の問題に就ては、彼れの教訓中にある道德的生活の獨立並びに内的であらねばならぬ事の主張に於て、イエスは道德的義務並びに行爲に關する合理的判斷の力として、到る處に人の良心にまで直接に訴へ給ふた事を見るのである。彼は良心を前提して教へを垂れ給ふた、

イエスの道德的自由的觀

結論

唯だ之を分解して議論し給はなかつたのみである。而して人生の嚴肅なる事を常に高調された所の諸々の教訓に於て、イエスは人の方面に於て善惡を撰ぶの自由があり、従つて愛の生活を取るか將た又利己の生活を取るかを決定する道德的着手權を有する事を前提し給ふたのである。

果して然らば、イエスは現代の秩序ある議論としての所謂倫理的系統を有し給はなかつたけれども、併しながら人生と其の目的、其の精神、其の動機、而して其の手段に關する徹頭徹尾統一ある終始一貫の思想としての倫理的系統は、イエスの明かに有し給ふた所である。然り而して此の倫理思想は人生に於ける驚くべき實行力として吾人の前に提供せらるゝのである。

イエスの倫理 下巻大尾

附録(一) 参考書並びに研究書目

一、一般倫理書

一般の倫理書は普通に基督教倫理の問題を討究せらるるなし、例へば Paulsen, Windt, Lotze, Green, Sidgwick, Stephen, Alexander, Dewey and Tufts, Palmer, Bowne, Mezes, Harris (Moral Evolution), DuBois (The Culture of Justice), Addams (Newer Ideal of Peace), Williams (A Review of Evolutional Ethics), Post (Ethics of Democracy), Rashdall (Theory of Good and Evil), etc.

二、基督教的若くは神學的倫理書

古代の書は概して先天的演繹的なれども、近代の著書は概して科學的歸納的なり。左に主要なる著者又は書目を掲げん。

Martensen, Wuttke, Schleiermacher, Rohde, Dörner, H. Weiss, Harless Hofmann, Frank, Luthardt, Beck, Kübel, Kähler, Pfeiderer, Schultz, Krarup, Köstlin, Herrmann (Ethic, Faith and Morals, Communion of Christian with God), Thoma, Jacoby, T. B. Strong, Knight Snyth.

Ottley, W. L. Davidson, Mackintosh, Murray, Maurice (Social Morality), Nash (Ethics and Revelation), Dobschutz (Christian Life in the Primitive Church), Clark (The Christian Method of Ethics), Mathews (The Church and the Changing Order), Fremantle (The World as the Subject of Redemption, and The Gospel of the Secular Life), Drummond (The Ideal Life), Gladden (Applied Christianity, and The Church and Modern Life), Leckie (Life and Religion), J. Smith (Christian Character as a Social Power), Rauschenbusch (Christianity and the Social Crisis), J. R. Campbell (Christianity and the Social Order), Peile (The Reproach of the Gospel, The Gospel for the 19th Century), Coe (Education in Religion and Morals), Haering (The Ethics of the Christian Life).

三 新約全書神學の著述

此等の著書は勿論イエスの教訓の全部に對するものなるもの。

Weiss, H. J. Holtzmann, Bayschlag, Harnack (What is Christianity?), Adeney, Gould, Gardner (Exploratio Evangelica), Bosworth (The Teaching of Jesus and the Apostles), Mathews (The Messianic Hope in the New Testament), Briggs (The Messial of the Gospels).

四 イエスの傳

Keim, Weiss, O. Holtzmann, Bayschlag, Reville, Sealey (Ecce Homo), Sanday, Edelsheim, Farrar, Geikie, Broadies, Wenle, Weinel, Schmidt (The Prophet of Nazareth), Bousset, Fairbairn (Studies in the Life of Christ), Matheson (Studies in the Inner Life of Jesus), H. J. Holtzmann (Das Messianische Bewusstsein Jesu), Parkin (The New Testament Portrait of Jesus), Selbie (The Life and Teaching of Jesus Christ), Forrest (The Christ of History and of Experience).

五 イエスの教訓に關する著述

Wendt (The Teaching of Jesus), Bruce (The Kingdom of God, The Training of the Twelve, The Parabolic Teaching of Christ, With Open Face), Stevens, Gilbert (The Revelation of Jesus), Horton, Jackson, Sweete, Latham (Pastor Pastorum), Walker Moorhouse, von Schrenck (Jesus and His Teaching), Brooks (The Influence of Jesus), Tolstoy (My Religion), Pullon, Ross, Contentio Veritatis (has one essay on the Teaching of Jesus), Muirhead (The Eschatology of Jesus), Goebel (The Parables of Jesus), Jülicher (Die Gleichnissreden Jesu), Dods (The Parables of Our Lord), Harnack (The Sayings of Jesus) The Creed of Christ.

山上の説教に關する廣大重要な文學に關してはヘンチンズ聖書辭典の増補卷に於けるツオトツの論文を看よ。

六、イエスの倫理に関する著述

イエスの倫理の歸納的研究はローバラー教授の言ひし如く比較的近世の研究に屬するものなる故に、此方面に関する特殊の文學は大ならず。

Briggs (The Ethical Teaching of Jesus), Peabody (Jesus Christ and the Christian Character, Jesus Christ and the Social Question), Stalker (Mago Christi, and The Ethics of Jesus) (但し未刊), Herrmann (Ethik, Faith and Morals, Die sittlichen Weisungen Jesu: The richtiger und ihr falscher Geharveh), A. Rau (Die Ethik Jesu), F. Grimm (Die Ethik Jesu), Ehrhardt (Der Grundcharakter der Ethik Jesu), Seeley (Ecce Homo), Brooks (The Influence of Jesus, Lectures I & II), F. P. Coffe (Studies New and Old, Chapter on Christian Ethics and Ethics of Christ), Feddersen (Jesu und die sozialen Dinge), Mathews (The Social Teaching of Jesus), Heuver (The Teaching of Jesus concerning Wealth), Horton (Commandments of Jesus), Dale (Laws of Christ for Common Life), Gardner (Exploratio Evangelica, has special chapter on "The Ethics of Jesus").

イエスの倫理に関する尤も貴重なる材料の或物は左記の聖書辭典及び宗教百科全書等の特別な論文中に見出さるべし。就中ヘンチンゲン聖書辭典

及び基督及福音辭典中に有益なる論文多し。

Hastings' Dictionary of the Bible, Dictionary of Christ and Gospels, Encyclopaedia of Religion and Ethics, The Encyclopaedia Biblica, the new Schaff-Herzog Encyclopaedia.

此等の辭典中の以下の項目は好個の參考たるべし。

"Teaching of Jesus Christ," "Ethics," "Jesus Christ," "Sermon on the Mount," "Lord's Prayer," "Asceticism," "Almsgiving," "Brotherhood," "Care," "Conscience," "Common Life," "Commandments," "Forgiveness," "Friendship," "Ideal," "Love," "Meekness," "Personality," "Purity," "Righteousness," "Self-denial," "Truth," etc.

附 録 (二) 本書上巻の目次

第一章 總 論…………… 一頁

イエスの教訓は夫れ自身の證明なり——是に關する文學の發達——イエスの人格を明確にする
 —新らしき歴史的解釋の必要——心理的解釋の必要——教訓の意義を發揮せしむ——イエ
 スの倫理の批評——客観的研究の必要——教訓の現代的應用——問題の範圍——圖取り寫眞
 の方法——本書の目的——材料に關するサンデーの斷案——Qなる書類の編成——共觀福音
 書の倫理訓の信憑すべき事——シユミীদের言——ハルナックのQ論——英佛獨の諸學者
 —ツェルンレンの言——シユミীদেরの支柱句——パークキットの重證句——支柱句と重證句
 との一致——研究の範圍——イエスは宗教と倫理とを區別せず——イエスの教訓の倫理的色
 彩——その宗教的前提——イエスの生涯は彼れの倫理の例證と實現なり——路加傳に於ける
 全教訓の概括——倫理訓の二大特徴——正直と愛との高調——教訓の革命的性質——權利の
 主張——絶對的宗教——愛の生命——倫理訓の根柢たる宗教的確信

第二章 シユミীদেরの支柱句及び重證句に於ける倫理

訓。批判の標準…………… 三三頁

シユミীদেরの支柱句の類別——彼れの選びし聖句——支柱句はイエスの全生涯に關聯す
 奇蹟に關する聖句——イエスの偉大を證明する聖句——シユミীদেরの推論——吾人の倫理
 的推論——論理的に排列されたる推論——以上の結論——重證句——重證句中の倫理的聖句
 —イエスの語の形式及種類——重證句中の人生の根本法則——十七聖句の研究——推論の
 總括——その論理的類別——道德的目的——善の勝利に對する信仰——愛は人生の總括——
 道德的證明——内的光明に對する忠誠——道德的手段——人生の統一、正直及び内的獨立——
 —靈的宗教——眞摯と警戒——習慣と効用の法則——愛に於ける生命の統一——他人との關
 係——イエスの全倫理訓の統一——内的獨立——絶對の公平——道德的明察の條件——眞摯、
 戒慎及び謙虛——結論

第三章 馬可傳及び馬太路加二福音書に共通なる他の材

料中に於ける倫理訓。最古の原材…………… 九四頁

Qに於ける倫理訓——研究さるべきQの聖句——野の試みの答——誘惑の背景——信任を蒙

用せず——靈感の維持——境遇の變化に依頼せず——パリサイ的精神に對する反抗——天國を閉ぢて入らしめず——區々たる義務に拘泥す——因襲主義對現代的内觀——進んで教す所の愛——人生の眞摯なる感——義なる生涯の危險——イエスの如き犧牲的奉仕の動機——義務の絶對的要求——一大逆説——人生の大價値に對する盲目的無頓着——委託物件の比喩——Qの結論

馬可傳に於ける倫理訓——馬可傳の全教訓——馬可傳中の選ばれたる聖句——馬可傳の倫理的色調——イエスの使命——イエスの方法——イエスの目的——イエスの倫理訓の革命的性質——新精神と舊形式——凡ての制度は手段のみ——危機の認識——宗教的遵守と人道的義務——因襲的儀式的宗教の危險——人生の大逆説——神の生命を頌たる——犧牲の精神の現代的必要——人生の二大誠律——人生の歸一と光榮——社會的應用——奉仕に依れる大望心——職業の新標準——嬰兒の尊敬と赤子の心——寛容——結婚に於ける敬愛——富の危險——國家に對する義務と宗教——馬可傳の比喩——馬可傳の倫理訓の總括——結論

イエスの倫理上巻目次終

明治四十三年十月五日印刷
 明治四十三年十月八日發行

▲下巻定價金五拾錢▲
 ▲合本金壹圓▲

複 製 不 許

譯 者 加 藤 直 士
 發行者 東京市東區尾花野町三丁目十五番地 福 永 文 之 助
 印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地 村 岡 平 吉
 印刷所 横濱市山下町八十一番地 福 音 印 刷 合 資 會 社
 發行所 東京市東區尾花野町三丁目十五番地 警 醒 社 支 店
 發行者 東京市東區尾花野町三丁目十五番地 警 醒 社 支 店
 賣捌所 東京市東區尾花野町三丁目十五番地 警 醒 社 支 店

キング博士著
 加藤直士譯
 イエスの倫理 上巻
 定價五拾錢

時事新報曰 本書は米國オヘリン大學總長ヘンリー チャーチル キング博士が昨年ハーバート大學のウヰリアム マルテン ノーブル講座に聘せられて試みたる八回の講演をシカゴ大學のシエラーマシユース氏が編集せし「新約全書研究書」第一卷「The Ethics of Jesus」を譯者が邦文に和けたるものにて、之には其上巻の出版を見たのみならず、未だ詳細といふを得ざれば博士が飽まで冷靜なる學術的研究の態度を以てせしに、かゝらばイエスの倫理訓が其宗教的方面と倫理的方面との重複せる立脚地を有せず無限の生命の活躍が個中に横溢せるを見るは大に注目すべきなり

加藤直士著

△宗教界の三偉人

定價十五錢 郵税二錢

聖僧アシ、のフランシス、傑僧サボロナ及フ
レデリック・ロボルトソンの三偉人の言行を
趣味多き筆致にて叙したり。

加藤直士譯

△我懺悔

定價四十錢 郵税六錢

近代露國の文豪また大理學家たるレヨフ、ト
ルストイ伯が懺悔録にして全世界の視線を吸
引したるもの譯文亦頗る精神に充つ。

加藤直士著

△トルス人の生觀

定價五十錢 郵税八錢

杜伯の名著「人生」を換骨脱胎して平易に之が
解説を試みたるもの附録として杜翁の「基督
教の眞髓」を添ふ。

加藤直士著

△二三問駁

定價十七錢 郵税四錢

加藤博士の唯物論的基督教に反對せるもの
「加藤博士の二問に答ふ」の外小山文學士の
「加藤博士の疑問に就て」及渡瀬牧師の「所謂
講後の二問題に就て」の二篇を含む。

加藤直士著

△眞勇

定價十八錢 郵税四錢

加藤直士譯

△最近贖罪論

定價二錢 郵税八錢

近世佛國の宗教學者オーギュスト・サバチエ
の大論文を譯せるもの基督教理に至大の關係
あり贖罪論の新解は即ち是れ。

加藤直士著

△戀愛の福音

定價十二錢 郵税四錢

原田助編著

△耶穌の時代

定價六十五錢 郵税八錢

獨逸の碩學サイデルの著を譯述せられたるも
の基督の教を知らんとするに緊要なる當代を
開明せるもの。

松本益吉譯

△耶穌の教

定價五十錢 郵税六錢

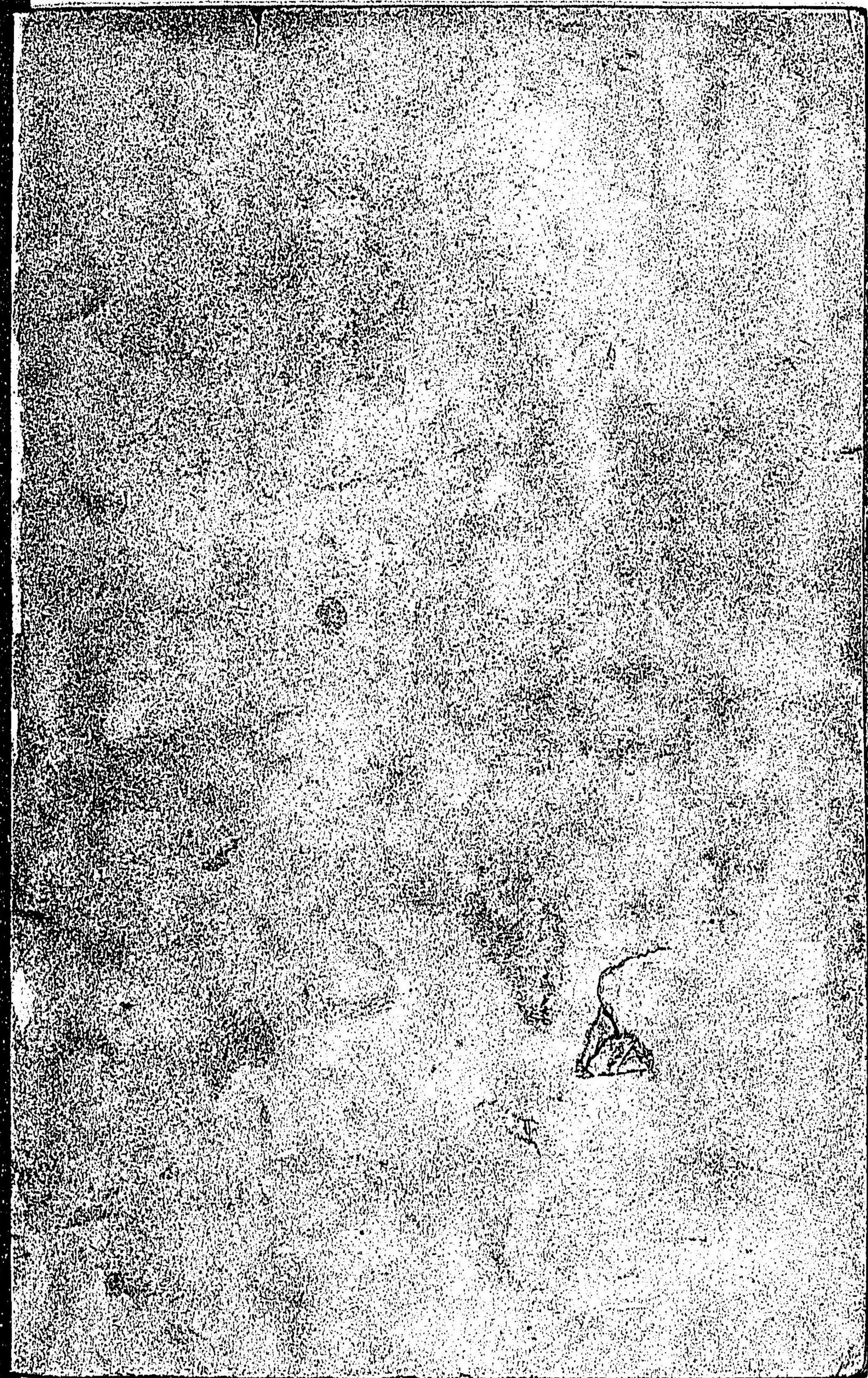
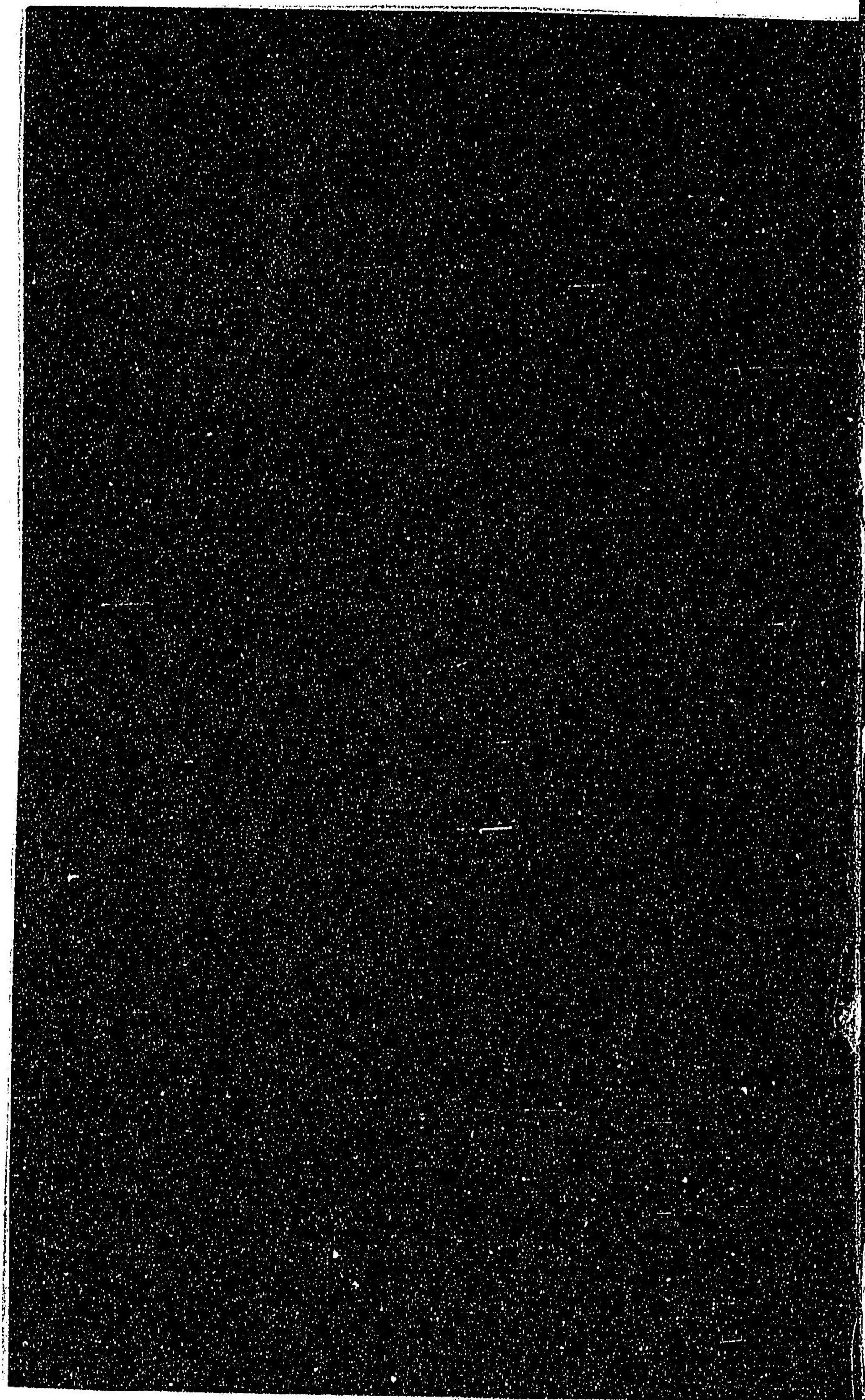
ニコル博士著 柏井園譯

△基督傳

定價並製七十錢 郵税八錢

多くの基督傳の中において博士の著は最も
健にして且情操に富む譯文に豊雅なる柏井園
氏の筆に成り加も寫眞版廿四葉を挿む。

724
781



324
84

